

# 政治思想学会会報

*JCSPT Newsletter*

第 41 号  
2015 年 12 月

---

## 目 次

### [評論]

建築と政治、制作と活動——山本理顕『権力の空間／空間の権力』によせて

森川輝一…………… 1

### [書評]

ホッブズのローマ、もしくは人文主義と帝国

——Daniela Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart* をめぐって

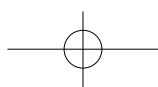
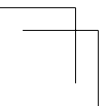
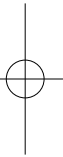
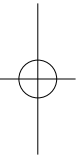
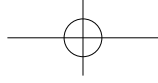
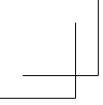
木村俊道…………… 7

### [会務報告]

2015 年度第 2 回理事会議事録 …………… 13

2016 年度政治思想学会研究大会プログラム (予定) …………… 14

---



## 建築と政治、制作と活動——山本理顕『権力の空間／空間の権力』によせて

森川輝一（京都大学）

先日、アーレント関連の集まりに誘って頂いた。酒席の最中で程よく酩酊した筆者を勧誘してくれたのは、筆者より少し若く、哲学カフェにて語り合いの実践に余念のない、気鋭の応用倫理学研究者である。また、つい先日、とある学会で筆者が司会を務めた分科会でアーレントの戦争概念をめぐる丹念なテキスト読解を披露してくれた報告者は、筆者よりずっと若い文学研究科の大学院生である。先般『人間の条件』のドイツ語版『活動的生 *Vita Activa*』の全訳（みすず書房刊）という記念碑的訳業を完遂した森一郎氏が、アーレントおよびハイデガー研究で名高い哲学研究者であることは言うまでもない。アーレントが狭義の政治思想・理論の枠をとくに越えて様々な分野で多様な考察の対象になっていることを、今さらながら実感している。むろん喜ばしいこととして、である。アーレントを論じるのに政治思想研究というタコツボにこもる必要はない。そのように言うのは、かつて上梓したアーレント研究書について当学会にて大意「非政治的概念の形成をめぐる物語であり政治思想研究とは言えない」との書評を頂戴したから、ではない（たぶん）。どのツボのタコが扱おうと、アーレントの思想が根本的には政治思想であることは変わらない。そのように言うのは、結局のところ筆者が政治思想研究のすみをスミで汚すタコだから、ではない（断じて）。アーレント自身が「政治理論家」を名乗り続け、政治について思考を重ねた思想家だから、である。それはしかし、アーレントの政治思想を理解するのに政治思想研究（者）が最適の位置を占める、ということの意味しない。

筆者を含む大半のアーレント読みは、「活動 action」と「仕事（制作）work」を区別し、政治を前者に結びつける。本人がそう説いているのだから仕方がないのだが、対等な市民が語り合う活

動こそ自由の政治で、政治を仕事に置き換えるのはプラトン以来の設計主義の弊で云々、みたいな話ばかりしているとだんだんつまらなくなってくる。自分たちが吐き出すスミでツボが淀んでくる。そんなことを思っていたタコに、山本理顕『権力の空間／空間の権力——個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ』（講談社選書メチエ、2015年——以下「本書」と表記）は実に刺激的であった。著者は第一線で活躍してきた建築家であり、日本および世界各地で住居や集落のフィールドワークに永年携わり（『新編』住居論（平凡社、2004年）に詳しい）、都市計画にも造詣が深い。その著者が、アーレントの著作（主に『人間の条件』）を独自に読み解きながら、現代の住宅建設や都市計画を徹底的に批判し、「地域社会圏」という新しいコミュニティ構想を提示するのが本書であるが、建築が典型的な「仕事」であることは論を俟たない。つまり本書は、「<sup>ホモ・ファベル</sup>工作人」によるアーレント論なのである。曰く、「アーレントほど「世界をつくる物」について深く考えた人はいない。人工物によってできている「世界」について深く考えた人はいない。「世界」は自由と平等の舞台であることをアーレントはよく知っていたのである。建築家はその「世界の物」をつくらなくてはならない。でも近代の建築家たちはその期待に十分に答えてはこなかった」（260-1頁）。

以下、本書を紹介しながら筆者の考えを書いてゆくことにするが、個々のアーレントの概念や文章の解釈をめぐるタコツボのツッコミは控え、建築家の眼差しが開くアーレント思想の風景を楽しむことを心掛けたい（以下、断りのないかぎり、頁数は本書のもの。『人間の条件』の訳文・訳語は、本書にしたがい、ちくま学芸文庫の志水速雄訳を使用している）。

第一章で『人間の条件』のポリス論に考察を加え、第二章以降で近代以降の住宅建築を批判する、という本書の構成にしたがい、第一章から始めたが、最初に述べておきたいことがある。

古代ギリシアのポリス (*polis*) という語は「都市 (国家)」という意味と「市民団」という意味を含むが、アーレントが「活動」の範例として論及する際の「ポリス」は、基本的に後者のそれである。よく引かれる一節を挙げておく。「正確に言えば、ポリスというのは、ある一定の物理的場所を占める都市国家 city-state ではない。むしろ、それは、共に活動し、共に語ることから生まれる人々の組織で〔中略〕それらの人々がたまたまどこにいるかということとは無関係である」(『人間の条件』27節、320頁)。この意味でのポリスとは、活動する者たちの間に出来る現れの空間であり、活動のなかで体験される出来事である(以下、「ポリス=活動体験」と呼ぶ)。「ポリス=活動体験」は都市国家の成立より古く、ホメロスが伝えるような戦場での技くらべに原型があり、これを言論の競い合いに置き換えたのが都市国家である。このようにアーレントは、ブルクハルト『ギリシア文化史』などを参照しながらポリス<sup>アゴーン</sup>を闘技という「活動体験」として捉えるのだが、「仕事」およびその産物としての都市<sup>ポリス</sup>との齟齬を強調している。曰く、ギリシア人は、都市の創設を建築という「仕事」の一種と見なして政治的行為とは見なさず、造形芸術を愛好しながらその作り手たる職人<sup>パナウツォイ</sup>を卑しい輩とさげすみ、公的領域と私的領域の調和よりも区別を強調し、そして、「汝らのゆくところがポリスなり」とうたい、都市<sup>ポリス</sup>の存続を重視しなかった。これらはすべて、都市の「創設」とその「保存と増大」を最重要視した「史上最大の政治的民族」古代ローマ人との対比で語られる。近代において唯一「自由の創設」に成功したアメリカ独立革命の人々が範と仰いだのは古代ギリシアではなくローマであったことは、アーレントの強調するところである。

一口に言えば、アーレントは「ポリス=活動体験」と「都市<sup>ポリス</sup>=建築空間」という二重性を、「活動」と「仕事」の区別に相応するかたちで際立たせる

のであるが、政治思想・理論研究者はおおむね前者に目を向ける。アーレントが「都市<sup>ポリス</sup>=建築空間」から切り離してくれたからこそ、「ポリス=活動体験」は現代デモクラシー論にも接合可能な政治概念となるのであり、この点はアーレントのポリスの「アゴーン」的要素を強調する論者だけではなく、ハーバーマス系の「熟議」理論家でも同じである(先に引いた『人間の条件』27節の一節に早くから注目していたのは Seyla Benhabib である)。そもそも歴史上「物理的場所を占め」た「都市国家」をモデルにすると、自由な活動の空間を城壁によって囲い込み、これを守る戦士市民が外に敵を討ち払い、内では婦女子や奴隷を支配する、等々、現代人には容認し難い要素がぞろぞろついてきてしまい、どうにも具合が悪いのである。

しかし、山本氏の読みはまるで逆を行き、アーレントのポリス論を、「ポリス=建築空間」という視座から読み解いてみせる。本書の考察は、公私の「境界線」にかかわる『人間の条件』8節の叙述の検討から始まる。曰く、ポリスの「法」はもともと「家と家との境界線」に由来し、さらにその「境界線」は「一つの空間、つまり、私的なものと公的なものとの間にある一種の無人地帯であって、その両方の領域を守り、保護し、同時に双方を互いに分け隔てていた」(『人間の条件』92頁)。他者の間に現れる公的領域に対して、各人が隠れて安らぐ家<sup>オイコス</sup>という私的領域の重要性を論じる箇所であり、筆者の見るところ、アーレントの力点は公私二つの領域の区別にある。それは、彼女がクーランジェの『古代都市』を参照しながら、クーランジェ以上に「家の竈」と「ポリス」の区別を強調する点にも示されている。しかし山本氏は、アーレントの言及する公と私を分ける「境界線」が、「アンドロン」という「空間」であることを指摘し、ポリス全体を「建築空間」として読み解いてゆくのである。

「アンドロン」とは「アンドロニティス」(男の領域)の中心をなし、家の一部ではあるが、家長が「他の市民を招き入れ」て饗宴<sup>シュンボシオン</sup>を行う食堂のような場所であり、公的な性格をもつ。しかしこ

れを、接客用の部屋、というふうに機能的に解釈してはならないと山本氏は言う。「アンドロニティス」が、公的領域（ポリス）と私的領域（「ギュナイコニティス」（女の領域））という二つの異なる空間を「結びつけると同時に分け隔てる」空間である、という点こそ肝要なのである。二つの領域の「あいだ」の空間を備えることによって、家<sup>オイコス</sup>は公的な領域に開かれた私的領域となっていたのであり、そして「都市（ポリス）は家（オイコス）の集合体であり、両者は「相互の関係において初めて成り立っていた」のである（22頁）。ポリスとは、このような建築空間として「最初から人工的に計画された」のであり（27頁）、「アーレントが強調するのは、ポリスという建築空間があってはじめて、人々の政治的自由そして平等が実現されるのであってその逆ではない、ということである」（33頁）。アーレント解釈として同意するわけではないが、ポリスという空間をめぐる考察として実に興味深い。

ポリス（公）とオイコス（私）の境界をなす空間は、「普遍的な空間概念」の一事例であり、山本氏はそれを「闕」（「空間的な広がりをもった敷居」）と呼ぶ（23-4頁）。闕という「建築装置」は古代ギリシアにかぎらず、日本を含めた世界各地の伝統的な集落や都市に「時空を超えて」見出される。アーレントにとって、古代のポリスとは、「ポリス＝活動体験」を最も純粋に追求した（がゆえに短命に終わった）、唯一無二の政治の始まりである。しかし山本氏にとって、ポリスとは、公私二つの領域を隔てながら結びつける「闕」をもつ「建築空間」の一例であり、同じ構造は、たとえば「かつての日本の家」の「座敷」にも見出されるのである（52頁）。

「ポリス＝活動体験」と「ポリス＝建築空間」とのズレは、むしろ広がってしまったようであるが、山本氏がアーレントと確かに共有しているものが一つある。近代以降ポリスが失われた、という痛切な認識である。現代は「労働」社会であり、活動する空間が失われ、仕事も労働に変わってしまい、誰もが生産と消費のプロセスの反復へと駆

り立てられ、共通世界から疎外されている。大略このようにアーレントが描き出す近代世界の道行に、山本氏は「ポリス＝建築空間」の解体過程を重ね合わせる。今日の標準的な住宅は、「ポリス＝建築空間」の要であった「闕」を失い、単に「プライバシーを守るためだけの場所」となってしまった。「隔離されてその外側との関係を持たない住宅は世界をつくらない。住宅は単にその内側で「人間の消費的生命過程」（家事、育児、生殖）を維持するための「機能」のみしか与えられていないからである。その住宅に住む私たちが「世界」を知ることはない」（55頁）。アーレントのいう「世界疎外」が「物化」された住宅に、私たちは追いやられ、閉じこめられているのである。

「消費的生命過程のパッケージ」として規格化された住宅の始まりは、産業化が進み都市労働者人口が急増した19世紀半ばに登場した「労働者住宅」である（第二章）。設計者たちの意図が労働者に快適な住宅を提供することにあつたにせよ、それは人々を「1住宅＝1家族」と規格化された空間に押しこめ、相互に孤立させ、住宅を労働力の再生産（生殖）という機能に特化させることになった（第二章）。「1住宅＝1家族」の「その上位の空間は産業資本家による管理空間」であり、さらに「国家規模の家計〔経済〕」に接合され、管理する機構として「官僚制」という「無人支配」のシステムが発達し、都市計画や住宅政策も「標準化」が基本となるが、そうした動向に建築家も同調してしまう。誇り高き工作人たるべき建築家による労働社会への迎合に対し、山本氏の批判のボルテージは高まる。ミースの「ユニバーサル・デザイン」は「社会に奉仕する建築空間」に過ぎず、「機械の美学」「均質性の美学」を追求したバウハウスの人々がナチスの強制的画一化に無力であったのはけだし当然である（第三～四章）。こうした流れの果てに、戦後日本の住宅が登場する。たとえば1951年に打ち出された公営住宅標準プラン（51C型）は、「食寝分離」「隔離就寝」を、すなわち狭い空間のなかで夫婦のプライバシー（具体的には「性現象」）を確保することをコンセプトとしたが、これはプライバシー（という名の

世界からの隔絶)に自由の象徴を見る現代人と、労働力の供給増という市場と国家の要請をとともに満たすものであった。これが日本の住宅一般の基本形となったが、「性現象の場所を中心にする住宅はその役割を果たし終えれば、つまり、自分の子孫を社会(経済的に組織された社会)のなかに送り込めば、もはやその役割を終える」ため、住宅は「平均して二七年で取り壊されている」。すべてが消費される商品となる労働社会で、住宅もその例外ではない(第五章、199頁)。

今こそ、ポリスが取り戻されねばならない。しかしポリスとは、アーレントにとっては「活動体験」であるが、山本氏にとって「建築空間」であり、具体的にいえば、「闕」のある住居を基本に構成される空間であり、氏はそれを「地域社会圏」と呼ぶ。近代批判で軌を一にしたかに見える二人の道は、ここで再び別れる。

山本氏のいう「地域社会圏」とは何か。「1住宅=1家族」の典型である通例の分譲マンションと比較してみると、一般に後者では専有部が全体の8割を占めるのに対して、「地域社会圏」では3~4割程度である。残りは共有部であり、これが「闕」にあたる。プライバシーが保護される空間を確保しつつ、インフラ部分やファシリティを可能な限り共有して無駄なコストを省くとともに、「闕」にあたる空間で、気の合う仲間同士でお茶会をしたり、他の住民相手に何か商売を始めたり、自分たちのコミュニティについて議論したり、と住民相互が様々な活動を行うことを可能にする(基本単位は500名程度)。つまり、「地域社会圏」は「コミュニティが“物化”された空間」であり、市場経済から相対的に独立した「地域ごとの権力」を可能にするのだから(240頁)、これこそ、アーレントの「評議会」構想に合致した公的領域ではないか、と山本氏は言う。筆者はそうは考えないし、また「地域社会圏」に住みたいとも思わない。20代の大半を古下宿で過ごし、トイレ共有の集合住宅なんて今さら御免だと筆者が思っているからか。それは否定できない。あるいは、若い頃団地で育ち、今はローンで購入した

マンションに住む筆者が性現象の秘匿性を確保して何が悪いと開き直りたいからか。それも否定できない。だが、それだけではない。

山本氏との対談での上野千鶴子氏の応答が、筆者の疑念を代弁してくれている。「私はやはりコミュニティや地域という言葉に対して、とても抵抗があるんです。地域社会圏というのはまさに地域と空間がくっついたものですが、空間の近接性が共同性をつくるという建築家の信念にはどうしてもついていけない」(山本理顕ほか『地域社会圏主義(増補改訂版)』、LIXIL出版、2013年、142頁)。戦後の夫婦向けの団地より大家族仕様の昔の屋敷を、職住分離の近代都市より「ギルド集団」が濃密な「コミュン」を形成していた中世都市を高く評価する(本書122頁以下)山本氏が打ち出す「地域社会圏」に、氏がどれほど否定しようとも、伝統的な地域共同体への嗜好を嗅ぎ取るなという方が無理である。とはいえ重要なのは、むしろ後半の指摘である。労働力の再生産のためにパッケージ化された住宅は近代資本主義の産物だ、という議論は納得できるにしても(上野氏の『家父長制と資本制』を引き合いに出すこともできる)、だからといって、住宅という建築空間を変えれば権力関係が変わるということにはならない。「空間の近接性が共同性をつくる」、本稿のことばに直せば「ポリス=建築空間」が「ポリス=活動体験」をつくりだす、という「建築家の信念」には「ついていけない」し、ついていくべきではない。建築(「仕事」)で政治(「活動」)を始める(「支配する」という夢こそ、「活動の伝統的代替物としての製作〔仕事〕」(『人間の条件』31節)というプラトン以来の偏見としてアーレントが批判し続けた当のものだからである。あるいは、家をもたずに人々の間に分け入って許し合うことを説き、自ら実践したナザレのイエスの事跡に、アーレントが「真の政治的経験」を見出したことの意味を考えてみてもよいだろう(同上33節)。

建築家の読むアーレントを楽しもうと書いておきながら、<sup>ホモ・フアベル</sup>工作人の政治観にケチをつ

けて終わるのか。いやいや、それでは本書を取り上げた甲斐がない。さしあたり二つ、言っておきたい。

一つは、「地域社会圏」の設計に住民が参加できるような仕組みにすれば、「ポリス＝建築空間」と「ポリス＝活動体験」の乖離は解消され、<sup>ホモ・フアベル</sup>工作人と活動の人とが共存できるのではないか、ということである。これはすでに山本氏が主張しており、氏の「地域社会圏」構想のなかに盛り込まれている。どころか、氏は建築家としてすでに実践しておられる（本書第五章で語られるのは、「住民と共に設計せよ」をモットーとする氏と氏の同志たちと、「選挙専制主義」との町庁舎設計をめぐる戦いである）。「ただ単に隣り合って住んでいるというような受け身の状態」を脱して、他者とともに住む空間のなかで「自らを際立たせようとする意志」をもち、空間のありようを「自ら決めるとする力、つまり「権力」」を発揮することを山本氏は説く（220頁以下）。

地域社会圏の設計をめぐる公的討議は、建築家など各種専門家と一般住民との熟議となるはずだから、トイレ共有が嫌なら、トイレは個別につけてくれと主張して他の人々を説得すればよい（普遍的に正当化可能な理由を示せば、山本氏もトイレ共有は諦めてくれるかもしれない）。「仕事」と「活動」は融合し、ポリスは一つにまとまって、何の問題もなさそうである。ここで止めれば綺麗に終わるが、そんなの面白くもなんともないので、もう一つのことを述べておく。

設計に熟議を取り入れても、基本的なコンセプトが「1住宅＝1家族」や「食寝分離」「職住分離」を打破するコミュニティである以上、「地域社会圏」は、やはり個人の自由に抑圧的な地域共同体になってしまうのではないか、という疑いは残る。伝統的な地域共同体の復活を目指しているのではない、と山本氏は繰り返す。それはそのとおりだと思うが、問題はそこにはない。山本氏の真の狙いおよび願いは、「闕」のある建築空間を取り戻すことである。そのためには、伝統的な住居から「闕」を奪い去り、建築という「仕事」を「労働」に変え、「人工世界」の一部たるべき住居を「消

費財」としての住宅に貶めてしまった、資本主義に抗わねばならない。建築家山本氏にとって、その抵抗の方法は、高い自足性をもち、市場から可能なかぎり自立（自律）を確保できる「空間」の設計・建築というかたちをとる。そのために、インフラを共有してエネルギーコストを減らし、共有部（「闕」）を増やしてそこでコミュニティ内部の経済活動も可能にして、市場への依存を減らす。その結果「地域社会圏」は、資本主義に破壊される前の、つまりは前近代的な地域共同体に似たものになってしまうのである。アーレントの場合は、どうか。

大著『全体主義の起原』のなかで、今世紀に入って新たに読み直されているのが、「政治化した資本主義」としての19世紀帝国主義を論じ、その結果生じた「難民」の省察で結ばれる第二部である。グローバルな資本主義という「膨張のための膨張」の過程に抗い、見棄てられた人々が安んじて住まうことのできる空間をつくりだすことを、元難民アーレントは希求してやまなかった。公的領域を「大海のなかの島、砂漠のなかのオアシス」にたとえているように、アーレントは、資本主義の全面的変革や打倒を（例えばマルクス主義者のように）唱えるのではなく、資本主義という大海のなかに、資本主義から自立した空間を確保することをめざした。自由の陸地は、それがどんなにちっぽけな島でも、海と区別されねばならない（公的領域から私的利益は排除されねばならない）。ここまでは山本氏と同じであるが、空間の建設という道を、アーレントは取ることができない。私的利益の充足という要素を除外して政治的空間をつくりだそうとする試みは、つまり「労働」を排して「仕事」によって秩序を創造するという夢は、アーレントの見るところ、プラトンに始まりルソーを経てシュミットにいたる、長い歴史をもつのだが、人々が自由に現れる空間を工作人の流儀でつくることはできない。『革命について』のルソー批判は、ルソーの向こうにシュミットを見据えた主権論批判であり、「仕事（制作）」によって政治的空間をつくるという夢への、アー

レントの訣別の辞であると言える。残ったのは「ポリス＝活動体験」だけ、人々が活動している間だけ出来るという、儂く脆くて頼りにならない、こんなもので空間が構成できたら「奇蹟」としか言いようのない活動だけ、である。アーレントはこれに賭けた。というより、賭けるしかなかった。

それは単にアーレントが古代のポリスにこだわって政治と経済を厳密に区別したせいではないか、というのが通例の反応だろう。その通りではある。だが筆者の見るところ、資本主義に政治的な力に対抗しようとする、同じことだが市場を市場外的な論理で規制したり限界づけたり、あるいは民主化したりしようとする、基本的にはアーレントと同じディレンマを抱え込むことになるのである。たとえばハーバーマスもロールズもコノリーも、その点で大差ないように見える。違いは、「生活世界」や「反照的均衡」や「多元化のエートス」などの、政治と経済を厳密に区別しなくても何とかなるような道具立てを用意しなかったアーレントの場合、ディレンマが剥き出しで現れる、という点にある。

政治はポリティクスをめぐるとして、山本氏は、「都市＝建築空間」の設計と建設に向かう。アーレントは、その道がすでに閉ざされているという洞察から「ポリス＝活動体験」の捉え直しへと向かい、空間を「活動」によってつくりだす、という難問に直面することになる。しかしそれはアーレント一人の問題ではなく、ポリスという空間秩序をめぐるとしての政治が、その始まりから孕んでいた難問であるように思われる。いや、政治をポリスという起源に結びつけ、空間の創出や保持にかかわる実践と見なすことが、そもそも時代錯誤の思いなしである。そういう見方もあろう。しかし、グローバルな「労働」の大海がすべてを押し流す今日ほど、自由な共生空間の創出と保持が喫緊の課題となった時代はない。そういう見方も可能ではないか。「ポリスは過去にあって既に失われた空間ではない。「世界」は今生きている私たち自身の意志によって未来の住人のために設計されなくてはならない空間なのである。これからやってくる住人のための空間である」

(249頁)。



## ホッブズのローマ、もしくは人文主義と帝国

— Daniela Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart* をめぐって

木村俊道 (九州大学)

### 1. マキアヴェッリとホッブズの間

古代ギリシア・ローマ以来の西洋政治思想の歴史は、マキアヴェッリとホッブズを通じて大きく転換したとされる。両者はとりわけ、政治科学 political science や近代国家 modern state 理論の定礎者として理解され、もしくは批判されてきた。むしろ、これとは逆に、両者の相違を強調した見解もある。たとえばホッブズの同時代人であるジェイムズ・ハリントンは、『オシアナ共和国』1656のなかで、マキアヴェッリを古代の思慮 ancient prudence と法の支配 empire of laws を回復させようとした唯一の政治家とみなす一方で、ホッブズを逆に、それらの破壊を企てた人物として批判した<sup>(1)</sup>。マキアヴェッリとホッブズは、古代から近代への転換点でもあり、分岐点でもある。それゆえ、この両者の関係を理解することは、西洋政治思想史研究における最重要の課題の一つなのである。

フィレンツェ大学のダニエラ・コーリ氏の著書『ステュアート朝イングランドにおけるホッブズ、ローマ、マキアヴェッリ』2009は、「タキトウスの冒頭部分に関する論考」（以下「タキトウス論」）を含む、若きホッブズによる「三つの論考」Three Discourses<sup>(2)</sup>の重要性に着目し、新たなホッブズ像の提示を試みる。1620年に出版された『余暇』*Horae Subsecivae*<sup>(3)</sup>に収録され、近年になってホッブズ作品であることが確定された「三つの論考」は、コーリ氏によれば、「マームズベリー哲学者のマキアヴェッリとの対話」と「古代ローマについての省察」を示したものである<sup>(4)</sup>。コーリ氏はまた、マキアヴェッリとホッブズとの相違を認識しながらも、両者がともに、反カトリック主義と古代ローマ崇拜という共通点

を有していたことを指摘する。そのうえで、とくに「タキトウス論」を中心に扱った第8章では、ホッブズの古代ローマ理解が詳しく考察されることによって、彼が「マキアヴェッリ以上のマキアヴェリアン」più machiavelliano di Machiavelli<sup>(5)</sup>であることが主張されるのである。

もっとも、ホッブズを「マキアヴェリアン」と理解するならば、どのような意味で「マキアヴェリアン」なのかが問われることになる。コーリ氏は一方で、ホッブズと『君主論』との議論の相関に注目する。すなわち、「万人の万人に対する」戦争状態においては偽装が必要とされるのみならず、最も狡猾な狐と最も強力な獅子でさえも、最も弱い者の共謀によって打ち殺されるのである<sup>(6)</sup>。他方でまた、コーリ氏は、ルソーの市民宗教論などとも共通する、『リウイウス論』（『ディスコルス』）における宗教論を取り上げる。すなわち、マキアヴェッリと同様、ホッブズもまた、国家の理論を神学から切断したうえで、『リヴァイアサン』第3部と第4部において、宗教が国家に奉仕するような「新たな政治文化」を提示したのである<sup>(7)</sup>。しかし、だとすると逆に、ハリントンの見解にもあるように、ホッブズをマキアヴェッリと決定的に分かつものは何か、改めて疑問が生じて来る<sup>(8)</sup>。この点はまた、後にも述べるように、マキアヴェッリが依拠したリウイウスと、ホッブズが参照したタキトウスとの違いとも関連してくるだろう。

### 2. 共和主義とホッブズ

この問題はさらに、ポーコックやスキナーをはじめとする先行研究とコーリ氏の研究との関係にも絡んでくる。周知のように、ポーコックは『マキアヴェリアン・モーメント』1975において、

1400年代のイタリアから17世紀のハリントン、そして18世紀のアメリカに至る共和主義の伝統を描いた。ポーコックはまた、『徳・商業・歴史』1985のなかで、このような共和主義的な徳の言説と、ホッブズやロックに代表される法や権利を中心とする言説とを区別した<sup>(9)</sup>。他方でスキナーもまた、『近代政治思想の基礎』1978や『自由主義以前の自由』1998、そして『ホッブズと共和主義的自由』2008において、ホッブズとは対照的な、共和主義のパラダイムを提示した<sup>(10)</sup>。

マキアヴェッリの古典的共和主義とホッブズの近代政治学とを対比させてきたこれらの研究を、コーリ氏はどのように評価し、批判するのか。ホッブズ自身も、『市民論』から『リヴァイアサン』、そして『ビヒモス』に至るまで一貫して、内戦を引き起こした主要な原因の一つとして、アリストテレスやキケロなどの古典古代の著作を挙げている。コーリ氏自身も一方で、共和政の柔弱さを批判するホッブズの議論から、彼が『君主論』や『リウィウス論』を「熟知」しており、「暗々裏に批判」していたとの判断を示す<sup>(11)</sup>。しかし、だとすればなおさら、ホッブズは逆に、「古の人々が集う古の宮廷」で古典を読むような「マキアヴェリアン」<sup>(12)</sup>を強く批判するのではないだろうか。いずれにせよ、ホッブズを「マキアヴェリアン」として理解するならば、同時にまた、「マキアヴェリアン・モーメント」をめぐる議論を見直す作業が避けられないだろう。

### 3. 人文主義とホッブズ

とはいえ、とくに初期のホッブズが、マキアヴェッリと同様に人文主義の影響を強く受けていたことは、シュトラウスやスキナーらによって繰り返し指摘されてきている<sup>(13)</sup>。実際にホッブズは、「三つの論考」に加え、トゥキユディデス『ペロポネソス戦史』の英訳版1629を出版し、アリストテレス『弁論術』の翻訳1637にも関与していた<sup>(14)</sup>。ただし、このことは一方で、ホッブズが、マキアヴェッリのみ還元されない、より広い人文主義的な同時代の知的コンテクストのなかで思

考していたことを示唆するようにも思える。なお、ここでは「人文主義」を広義に捉え、共和主義や市民的人文主義civic humanism、あるいは特定のイデオロギーなどに限定されず、古典古代を模範とし、文法・修辞・詩・歴史・道徳哲学を基礎的な教養（「人文主義的教養」studia humanitatis）とする知的伝統として、ひとまず理解しておきたい。

さて、このようなホッブズと人文主義との関係を示す例を挙げれば、たとえば『ペロポネソス戦史』英訳版において彼は、この時点ではまだ、ホメロスの韻文、アリストテレスの哲学、デモステネスの弁論といった古典古代の学問が優れていることを認めていた。しかも、ホッブズによれば、「歴史の主要にして固有の任務」は「過去の行為を知ることを通じて、現代においては慎重にprudently、未来にむかつては先見の明を持って振舞うように、人々を導き、そのように可能ならしめること」にある。このような人文主義に典型的な歴史観を示したうえで彼は、同時代に広く読まれたリプシウスの『政治学』を参照するなどして、トゥキユディデスを理想的な歴史家として称賛したのである<sup>(15)</sup>。

ルネサンス期の人文主義についてはまた、ピーター・バークやリチャード・タック、マルック・ペルトネンらの研究にもあるように<sup>(16)</sup>、タキトゥスを含めた歴史書の受容、リプシウスに代表される新ストア主義や政治的思慮の議論、そして同時代のジェントルマン教育におけるレトリックの重要性といった主題も浮かび上がってくる。そして、なかでも、マキアヴェッリとホッブズの両者を結びつける重要な結節点となるのが、フランシス・ベイコンであろう。ホッブズは、ベイコンの『政治道徳論集』1597、1612、1625のラテン語訳を手伝ったと言われている<sup>(17)</sup>。そして、そのベイコンは『学問の進歩』1605において、「人は何をすべきか」ではなく「何をするかを記した」マキアヴェッリを例外的に高く評価した<sup>(18)</sup>。ベイコンはまた、グレヴィル宛の書簡のなかで、トゥキユディデスとリウィウスを薦めるだけでなく、「あらゆる歴史物語」のなかでタキトゥスを「まさし

く最良」とした<sup>(19)</sup>。このように、人文主義の多様な知的伝統へと視点を広げることで、近代科学の影響を受ける以前のホッブズ政治思想の基礎がよりよく明らかになるであろう。

#### 4. 思慮から科学へ? — 「タキトゥス論」

このような人文主義のコンテクストに照らし合わせると、「三つの論考」について何が新たに見えてくるだろうか。たとえば、ベイコンの『政治道徳論集』と形式と内容が類似する『余暇』のなかで、「三つの論考」を、「傲慢」や「野心」や「カントリ・ライフ」などを主題とする他の12のエッセイや「追従論」と併せて読むと、ホッブズや、彼のパトロンであるキャベンディッシュ家を取り囲んでいた知的な風景や政治的な情景が見えてくるのではないか。あるいは、「タキトゥス論」だけに限定しても、ホッブズが、当時のヨーロッパの宮廷社会で広く読まれていたタキトゥスの『年代記』を改めて取り上げたのはなぜか。あるいはまた、議論の対象を、『年代記』の本題である第二代皇帝ティベリウス以降の治世ではなく、その記述が始まる手前の、冒頭部分に限定したのはなぜかといった疑問も湧いてくる。

なかでも、「タキトゥス論」が、『市民論』や『リヴァイアサン』といった以降のホッブズ政治哲学civil philosophyの形成にどのように関与していたのかは、一つの大きな論点になるだろう。このことはとくに、リプシウスやベイコンにとって、タキトゥスが政治的思慮political prudenceの宝庫とされていたことを考え合わせると、アリストテレス以来の古典的な政治学から科学的な近代政治学への転換を理解するうえでも避けられない問題になる。これに対して、ホッブズは『リヴァイアサン』のなかで、経験に存する思慮を哲学の一部分でないとし、推論によって得られる科学scienceとは明確に区別した<sup>(20)</sup>。のちに、自身の『市民論』より前に政治哲学はないと言い切るに至ったホッブズにとって、タキトゥスは読み継ぐべき政治学の古典であり続けたのであろうか。

#### 5. 統治の技術—古代ローマとアウグストゥスをめぐって

さて、「タキトゥス論」の内容に関して言えば、そこでの重要な二つのトピックは、共和政res publicaから帝政imperiumへの移行と、それを可能にした「新君主」アウグストゥスの評価である。リウイウス『ローマ建国史』に基づき、自由とヴィルトゥによって成立した共和政ローマを主な対象とするマキアヴェッリに対し、ホッブズは、その共和政ローマの崩壊からアウグストゥスによる支配権の確立と帝位の継承を記した『年代記』の冒頭部分に注釈を加える。『リウイウス論』が仮に共和主義の古典だとすると、「タキトゥス論」は、どのようなコンテクストのなかに位置づけられるのか。このような関心からは、近年、君主主義や王党主義、宮廷文化、あるいは、以下でも述べるような帝国論の見直しが進んでいることも見逃せないだろう<sup>(21)</sup>。初期近代ヨーロッパにおける政治の中心は君主と宮廷であった<sup>(22)</sup>。「タキトゥス論」は、共和主義のみならず、ジェームズ一世の王権神授説やフィルマーの父権論とも異なる、君主政国家や宮廷社会を舞台とした、もう一つの「モーメント」を示す作品の一つとして理解できるだろうか。

ホッブズはまた、アウグストゥスを「統治の技術」art of governmentの「学識あるマスター」として高く評価する。ホッブズによれば、「統治の主要な技術」は「時と場所と人に順応する技術」であり、「節度ある交際」や「正当な理由から感情や目的を抑えて隠す能力」のことを意味した。アウグストゥスは、このような統治の技術を駆使して兵士や民衆の心をつかみ、急ぐことなく、時間をかけて継続的に任務を遂行することによって「自由国家を君主政へと転換させ」、「現状の国家を維持し」、「内戦を回避した」のである<sup>(23)</sup>。このような、時には偽装や欺瞞も容認する統治技術論は、マキアヴェッリのみならず、タキトゥスを受容したリプシウスやベイコンなどの人文主義者によって再生産されてきた（ただし、マキアヴ

ェッリはアウグストゥスをどう評価しただろうか?)。これに対して、自然法論や主権論などが展開されたホッブズの『市民論』や『リヴァイアサン』のなかで、「タキトゥス論」におけるアウグストゥス論や統治技術論は、斥けられるのか、それとも、彼の政治学のなかに、所与の前提として最初から織り込まれていたのだろうか。

## 6. ブリテン帝国におけるホッブズ

とはいえ、少なくとも若きホッブズにとって、古代ローマは「偉大さ」greatnessを獲得した「帝国」empireであり、アウグストゥスは「全帝国の絶対的な主権」を有していた<sup>(24)</sup>。その一方で、同時代のイングランドに目を向けると、コーリ氏も指摘するように、ホッブズは『リヴァイアサン』第19章において、ジェームズ一世を「われわれの最も賢明な王」として高く評価する。なぜなら、ジェームズは、「政治の本当の諸規則」the true rules of Politiquesを知る古代ローマ人と同様に、イングランドとスコットランドとの統合を目指したのであり、それが成功していれば、おそらく内戦を防ぐことができたからであった<sup>(25)</sup>。ホッブズはまた、『ビヒモス』のなかで、「多くの国々の支配者」であったローマ人を念頭に、「イングランド人もスコットランド人も、互いを外国人と呼び合うのは間違っていると思う」とも述べている<sup>(26)</sup>。そして、コンラッド・ラッセルやジョン・モリルらによる最近の研究成果を参照するまでもなく、『ビヒモス』は実際に、当時の「内」戦を、イングランドとスコットランド、そしてアイルランドの「三王国」の間の戦争として描いたのである<sup>(27)</sup>。

これらのホッブズの言明は、近代国家の理論的な定礎者として彼を単純に理解することはできないことを示している。コーリ氏によれば、古代ローマは「帝国を夢見るイギリスのモデル」<sup>(28)</sup>になった。近年の研究ではまた、ポーコックやアーミテイジらによって、同時代のイギリスが、一元的な権力と均質な国民を有する国家ではなく、ウェールズやスコットランド、アイルラン

ド、アメリカなどの植民地を包括する「複合的」compositeもしくは「多元的」multipleな「ブリテン帝国」British empireであったことが認識されるようになってきている<sup>(29)</sup>。「タキトゥス論」における古代ローマ帝国への着目は、ジェームズと同様にホッブズもまた、個人の間だけでなく、複数のリヴァイアサンやビヒモスが生存競争を繰り広げる世界に生きていたことを示している。

近年では他方で、マキアヴェッリの政治思想もまた、近代国家の理論や共和主義に限られず、このような帝国や複合国家の観点からも理解されるようになってきている<sup>(30)</sup>。彼は『リウイウス論』の冒頭部分からすでに、「ローマの草創がどのようなものであったか」を知れば、ローマが豊かなヴィルトゥを保ち、共和国から帝国へと発展したことも驚くにあたらないと述べていた<sup>(31)</sup>。また、なかでも注目されるのは、『君主論』の第3章から第5章と、『リウイウス論』の第2巻であろう。前者においては、まさしく混合型君主国の事例と征服の方法が記述され、後者では、現状維持国家のスパルタやヴェネツィアとは異なる、ローマによる拡大の方法が論じられたのである。

それゆえ、マキアヴェッリとホッブズの政治思想はともに、同時代における帝国や征服、あるいは複合国家の問題に実践的に取り組んだ例としても理解できるであろう。たとえば、「タキトゥス論」のなかでホッブズは、属州にとって、党派対立の激しい共和政よりも、邪悪な君主による支配の方が望ましいと主張した<sup>(32)</sup>。また、コモンウェルスの「栄養と生殖」を扱った『リヴァイアサン』第24章では、植民はコモンウェルスの子供であり、移民が定住した場合には、主権者への臣従を免除されたコモンウェルスとして自立するか、もしくは、ローマのように属州として本国との結びつきを保つとの見解も示されたのである<sup>(33)</sup>。

本書の他の章でコーリ氏が議論しているように、ホッブズはキャベンディッシュの家庭教師としてイタリア旅行を経験するとともに、その一方では、ヴァージニア・カンパニーとも関わりを有していた。これらのことは、若きホッブズが見て

いた世界が、イングランドという一つのリヴァイアサンのなかに狭く限定されないことを物語っている。現代のわれわれもまた、『市民論』や『リヴァイアサン』だけでなく、「三つの論考」を新たに読むことを通じて、近代政治学や近代国家の歴史に還元されない、「マキアヴェッリ以上のマキアヴェリアン」としての新たなホブズ像や、あるいは古典古代を範型とする人文主義的な政治学の持続的な展開を知ることができるだろう。その意味で、「三つの論考」のイタリア語訳も含む本書は、『リウィウス論』と『リヴァイアサン』という「古典」の間にある、古代の政治的思慮と近代の政治科学との結節点を理解するために欠かせない、重要な研究成果なのである。

※本稿は、コーリ氏を迎えて、2015年9月25日に関西大学法学研究所で開催された第50回シンポジウム（「ホブズのローマ：タキトゥスとマキアヴェッリの間で」）で配布された討論用の原稿の日本語版に一部加筆・修正を加えたものである。当日のコメントは英語版をもとになされた。本稿の掲載を提案・推薦していただいた安武真隆氏（関西大学）、コーリ氏の招聘に尽力された石黒盛久氏（金沢大学）、そして、拙い議論にかかわらず真摯に応答していただいたコーリ氏に深く感謝いたします。

## 注

- (1) James Harrington, *The Commonwealth of Oceana*, in his *The Political Works of James Harrington*, (ed.), J. G. A. Pocock (Cambridge University Press, 1977), p. 161.
- (2) Thomas Hobbes, *Three Discourses: A Critical Modern Edition of Newly Identified Work of the Young Hobbes*, (eds.), N. B. Reynolds and A. W. Saxonhouse (The University of Chicago Press, 1995). 他の2つは、「ローマ」と「法」に関する論考である。
- (3) Anon, *Horae Subsecivae: Observations and Discourses* (London, 1620).
- (4) Daniela Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart* (Le Lettere, 2009), p. 5. なお、この作品の読解や翻訳には、シンポジウムに際して石黒氏が準備された下訳を参照した。
- (5) Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli*, pp. 7, 148.
- (6) Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli*, p. 148.
- (7) Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli*, pp. 7, 149-150.
- (8) Cf. Coli, 'Hobbes's Revolution', in Victoria Kahn,

Neil Saccamano and Daniela Coli (eds.), *Politics and the Passions, 1500-1850* (Princeton University Press, 2006), pp. 75-92.

- (9) J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and The Atlantic Republican Tradition, with a New Afterword by the Author* (Princeton University Press, 2003) (ポーコック『マキアヴェリアン・モーメント—フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』田中秀夫他訳、名古屋大学出版会、2008年); *Virtue, Commerce, and History* (Cambridge University Press, 1985) (『徳・商業・歴史』田中秀夫訳、みすず書房、1993年).
- (10) Quentin Skinner, *The Foundations of Modern Political Thought*, 2 vols (Cambridge University Press, 1978) (スキナー『近代政治思想の基礎—ルネッサンス、宗教改革の時代』門間都喜郎訳、春風社、2009年); *Liberty before Liberalism* (Cambridge University Press, 1998) (『自由主義に先立つ自由』梅津順一訳、聖学院大学出版会、2001年); *Hobbes and Republican Liberty* (Cambridge University Press, 2008).
- (11) Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli*, p. 132.
- (12) マキアヴェッリ「書簡」松本典昭・和栗珠里訳、『マキアヴェッリ全集6』筑摩書房、2000年、244頁。
- (13) シュトラウス『ホブズの政治学』添谷育志他訳、みすず書房、1990年。Skinner, *Reason and Rhetoric in the Philosophy of Hobbes* (Cambridge University Press, 1996); *Visions and Politics*, vol. 3: Hobbes and Civil Science (Cambridge University Press, 2002). 佐藤正志「歴史における真理と修辞—初期ホブズにおける方法の問題」、澁谷浩編『啓蒙政治思想の形成—近代政治思想の研究 (I)』成文堂、1984年、37-73頁。
- (14) Hobbes, *Hobbes's Thucydides*, (ed.), Richard Schlatter (Rutgers University Press, 1975). Hobbes and Bernard Lamy, *The Rhetorics of Thomas Hobbes and Bernard Lamy*, (ed.), J. T. Harwood (Southern Illinois University Press, 1986).
- (15) Hobbes, *Hobbes's Thucydides*, pp. 6, 27 (山田園子訳「トマス・ホブズ『トゥーキューデデースの生涯と歴史』(上・下)」『広島法学』31巻2号(2007年)218-219頁、『広島法学』31巻3号(2007年)49頁). Justus Lipsius, *Politica: Six Books of Politics or Political Instruction*, (ed.), Jan Waszink (Royal Van Gorcum, 2004), p. 732.
- (16) Peter Burke, 'A Survey of the Popularity of Ancient Historians, 1450-1700', *History and Theory*, Vol. 5, No. 2 (1966), pp. 135-152; 'Tacitism,

- Scepticism, and Reason of State', in J. H. Burns (ed.), *The Cambridge History of Political Thought 1450-1700* (Cambridge University Press, 1991), pp. 479-498. Richard Tuck, *Philosophy and Government 1572-1651* (Cambridge University Press, 1993). Markku Peltonen, *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought 1570-1640* (Cambridge University Press, 1995); *Rhetoric, Politics and Popularity in Pre-Revolutionary England* (Cambridge University Press, 2013).
- (17) オーブリー『名士小伝』橋口稔・小池銈訳、富山房、1979年、101頁。
- (18) Francis Bacon, *The Advancement of Learning* in Michael Kiernan (ed.), *The Oxford Francis Bacon*, vol. 4 (Clarendon Press, 2000), p. 144 (ベーコン『学問の進歩』服部英次郎・多田英次訳、岩波文庫、1974年、282頁)。
- (19) Bacon, 'Letter of Advice to Fulke Greville', in Alan Stewart with Harriet Knight (eds.), *The Oxford Francis Bacon*, vol. 1 (Clarendon Press, 2012), p. 210. 木村俊道『顧問官の政治学—フランス・ベイコンとルネサンス期イングランド』木鐸社、2003年、116-119頁。
- (20) Hobbes, *Livianathan*, (ed.), Richard Tuck (Cambridge University Press, 1991), pp. 36, 458 (ホッブズ『リヴァイアサン』(一)水田洋訳、岩波文庫、1992年、93頁。同『リヴァイアサン』(四)水田洋訳、岩波文庫、1985年、105頁)。
- (21) D. L. Smith, *Constitutional Royalism and the Search for Settlement, c. 1640-1649* (Cambridge University Press, 1994). Cesare Cuttica and Glenn Burgess (eds.), *Monarchism and Absolutism in Early Modern Europe* (Pickering & Chatto, 2012). David Starkey et al., *The English Court: from the Wars of the Roses to the Civil War* (Longman, 1987). L. L. Peck (ed.) *The Mental World of the Jacobean Court* (Cambridge University Press, 1991). 木村「君主制」、古賀敬太編『政治概念の歴史的展開』第6巻、晃洋書房、2013年、73-96頁。同「君主主義の政治学—初期近代イングランドにおける「文明」と「政治」」、犬塚元編『岩波講座 政治哲学』第2巻、岩波書店、2014年、3-25頁。なおまた、共和政時代のフィレンツェのみならず、それ以降のトスカナ大公国の時代までを視野に収めた研究として、石黒盛久『マキアヴェッリとルネサンス国家—言説・祝祭・権力』風行社、2009年。
- (22) 木村『文明の作法—初期近代イングランドにおける政治と社交』ミネルヴァ書房、2010年。
- (23) Hobbes, *Three Discourses*, pp. 65, 57, 45, 47.
- (24) Hobbes, *Three Discourses*, pp. 71, 52.
- (25) Hobbes, *Livianathan*, pp. 137-138 (『リヴァイアサン』(二)、水田洋訳、岩波文庫、1992年、67-68頁)。
- (26) Hobbes, *Behemoth* in Paul Seaward (ed.), *The Clarendon Edition of the Works of Thomas Hobbes*, vol. 10 (Clarendon Press, 2010), p. 152 (ホッブズ『ビヒモス』山田園子訳、岩波文庫、2014年、68頁)。
- (27) 山田「解説」、ホッブズ『ビヒモス』393-396頁。
- (28) Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli*, p. 7.
- (29) Pocock, *The Discovery of Islands: Essays in British History* (Cambridge University Press, 2005) (ポーコック『島々の発見—「新しいブリテン史」と政治思想』犬塚元監訳、名古屋大学出版会、2013年)。David Armitage, *The Ideological Origins of the British Empire* (Cambridge University Press, 2000) (アーミテージ『帝国の誕生—ブリテン帝国のイデオロギー的起源』平田雅博他訳、日本経済評論社、2005年)。
- (30) Mikael Hörnqvist, *Machiavelli and Empire* (Cambridge University Press, 2004). A. M. Ardito, *Machiavelli and the Modern State: The Prince, the Discourses on Livy, and the Extended Territorial Republic* (Cambridge University Press, 2015). 厚見恵一郎『マキアヴェッリの拡大的共和国—近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』木鐸社、2007年。鹿子生浩輝『征服と自由—マキアヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』風行社、2013年。
- (31) マキアヴェッリ『デイスコルシー「ローマ史」論』永井三明訳、ちくま学芸文庫、2011年、24頁。
- (32) Hobbes, *Three Discourses*, pp. 47-48.
- (33) Hobbes, *Livianathan*, p. 175 (『リヴァイアサン』(二)、145-146頁)。

---

## 2016 年度政治思想学会研究大会プログラム（予定）

---

日程：5月28日（土）・29日（日）

会場：名古屋大学 東山キャンパス

統一テーマ：政治思想研究における「方法」

◆5月28日（土）

10：30～13：10 シンポジウムⅠ 政治思想研究における方法

司会 宇野重規（東京大学）

報告 加藤哲理（名古屋大学）「精神史から存在論へ——ハイデガーの思索の道から」

近藤和貴（日本学術振興会）「レオ・シュトラウスと政治哲学の方法」（仮）

討論 半澤孝磨（東京都立大学名誉教授）

荻部直（東京大学）

13：10～14：30 休憩／理事会

14：50～17：30 シンポジウムⅡ 政治学と政治思想

司会 田村哲樹（名古屋大学）

報告 渡部純（明治学院大学）「丸山眞男は役に立つのか」

松元雅和（関西大学）「規範研究における実証研究の役立て方——反照的均衡を中心に」

趙星銀（東京大学）「松下圭一における「政治思想」と「政治学」」（仮）

討論 河野有理（首都大学東京）

17：40～18：10 総会

18：30～20：30 懇親会

◆5月29日（日）

9：20～12：20 自由論題

分科会A

司会 小田川大典（岡山大学）

報告 大澤麦（首都大学東京）「共和国のモーメント——O・クロムウェル護国卿体制下の共和派（コモンウェルス＝メン）の理念」

有吉弘樹（京都大学大学院）「カント政治思想における「実践的判断力」の意義——予備的考察」

村田陽（同志社大学大学院）「J. S. ミルのリベラリズムに関する一考察——J. ロールズの視点を通して」

分科会B

司会 木部尚志（国際基督教大学）

報告 杉本竜也（日本大学）「政治哲学における「愛」に関する試論」

水谷仁（名古屋大学）「マックス・ヴェーバーの責任倫理の政治思想——ヴェーバー自身の価値から」

谷本純一（福岡教育大学）「代表制政治システムにおける例外状態の内包性と必然性」

分科会C

司会 辻康夫（北海道大学）

報告 北村浩（政治経済研究所）「ソーシャルワークにおける人格概念、主体をめぐる諸問題」

松尾隆佑（法政大学大学院）「企業経営における政治的なもの——経済権力の民主化へ向けた予備的考察」

犬飼渉（東京大学大学院）「現代の分配的正義論における見解の不一致と収束について」

12：20～13：30 休憩／理事会

13：40～14：00 総会

14：10～16：50 シンポジウムⅢ 政治思想研究と隣接諸学

司会 野口雅弘（立命館大学）

報告 坂井豊貴（慶應義塾大学）「経済学の視点から多数決を考える」

谷口功一（首都大学東京）「法哲学の視点から共同体を考える」

松沢裕作（慶應義塾大学）「統治の思想と実務——明治地方自治体制の研究史から」（仮）

討論 山岡龍一（放送大学）



2015年12月20日発行 発行人 押村 高 編集人 堤林 剣  
政治思想学会事務局 〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町56-1 立命館大学法学部 野口雅弘研究室内  
Fax : 075-465-8294 E-mail : admin-jcspt@ritsumeilaw.jp

会員業務（退会・会費納入・名簿記載事項変更・会報発送・学会誌発送）

（株）アドスリー 〒164-0003 東京都中野区東中野 4-27-37

Tel : 03-5925-2840 Fax : 03-5925-2913

学会ホームページ : <http://www.jcspt.jp/>